

## 商業都市アレppo

寺 阪 昭 信

### I はじめに

1987年7月に筆者は初めてシリアを訪れることとなった。これは文部省の科学研究費による海外学術調査の一環としてであった。今世紀初めから現在に至るまでのこの地域における都市の発達を多面的に解明しようとするのが研究の目的であった。滞在予定が短かったので、最初は予備調査と考えていたが、良いカウンターパートに恵まれ、シリア側の関係諸機関が好意的な対応をしてくれたし、多くの方々の協力を得て予想以上に調査がはかどった。同じ中東地域とはいえ、いままでに経験していたトルコの世界とは異なったアラブ世界ということで、言葉も分からないし、第三世界的な状況により最初はかなり緊張した調査であった。その後、1989年3月にも1週間ほど1人で再訪することが出来、そして夏の調査の補足を行うこととなった。

われわれがシリアにおける調査地域としてこの国の北西部に位置するアレppoを選んだのは、調査協力者という人脈の問題もさることながら、首都のダマスカスよりも人口規模が小さく、首都でないことによる、より開放的な環境をもつことによる利点が大きかった。またヨーロッパ諸国における多くの研究成果の蓄積を参照することによって、相対的に理解のしやすい都市であるということからであった。現在のシリア第2の都市であるアレppoは都市の起源をさかのぼると紀元前2千年以上になり、古くから商業都市として発達してきた歴史都市である。そして有名なスーク（大市場）は中世以来の形態をよく現在に止めており、しかも過去の遺物としてではなく、十分にその機能を果たして、

過去と現在との連続性があるところに特色がある。その他にも旧市域には多くの歴史的なモニュメントが残されていて、その長い歴史を刻みこんでいる。そのような古い側面と近代的な大都市としての側面とのコントラストが興味深い。

この論文においてはアレppoの現在の商業機能という側面に焦点を当てて、とくに具体的な調査をしたバーブルハディッドを中心に論じて、この都市の特性を明らかにしてみる。そこにはアラブ的な零細な伝統的商業の地域構造と近年における社会主義的な体制に基づく新しい商業施設の乏しさとのコントラスト、すなわち、そのことが空間的に投影されていて、旧市街地と新市街地との対比、という商業活動の分布の偏りが著しいことがまず目につく。郊外地区においては住宅の建設は進むものの、その住民に対応する商業施設、いわゆるショッピングセンターの類いの整備はなされていない。これらの地域については調査する機会はなかったが、ひとわり見ることは出来た。

### II シリアの商業

まず、マクロにみて商業都市としてのアレppoをシリア全土のなかで位置づけてみる。

1981年の統計により県別の状況（図1）を検討してみると、卸売・小売・飲食店・ホテル事業所数は全国113,820のうち、ダマスカス市に21,841、アレppo県に25,752と2大都市に集中している。

卸売業は全国4,593にたいしてアレppo県に961、ダマスカス市に830（さらにダマスカス県に100）となり、両者を合わすとおよそ4割になる。

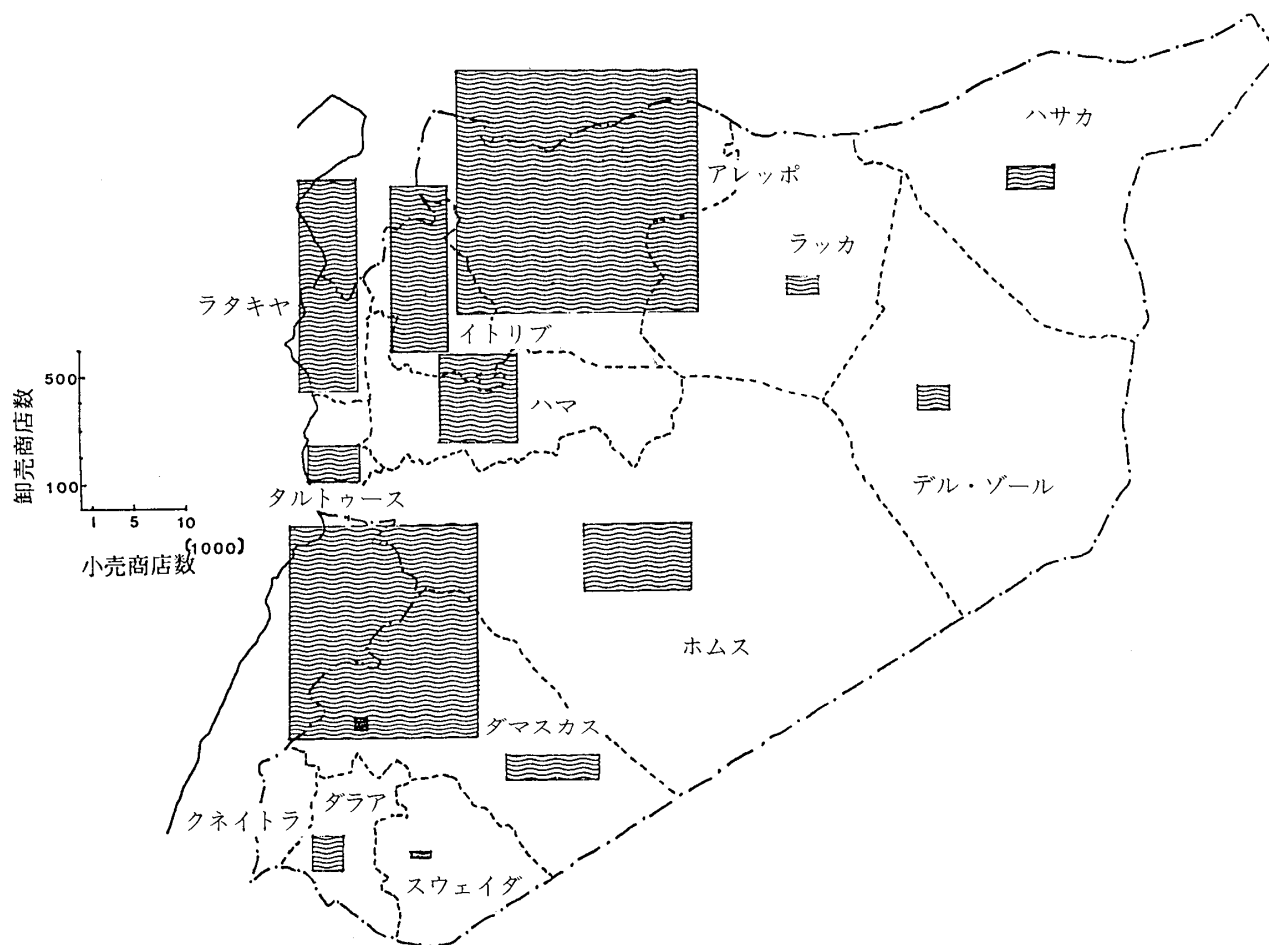


図 1 シリアの商業 (1981年)

小売業は全国100,615にたいして、アレッポ県23,170、ダマスカス市18,606（更に県8,940）となり、5割強になる。

小売業は青果物（8.4%）、魚肉類（6.6%）、飲食料品（40.3%）、衣服・繊維製品・家具（18.6%）、家庭用品（7.8%）、木材・衛生用品・電気製品・建築材料（4.4%）、金属・機械製品（2.0%）、その他（12.0%）の8種類に分類されている。

現在の人口が2位のアレッポのほうが、人口が1位のダマスカスよりも商店数において数が多いということを統計的には示している。すなわち、ダマスカス市の商業のほうが商店数が少なくてより多くの人口に対してサービスを行っているということであり、これは規模が大きいということである。事実、アレッポの商店は古くからの伝統を引き継ぎ、外見上からも古い建

物で間口の狭い規模の小さいものが多いという感じがする。両者の違いは商業の歴史とかつての人口規模の差異、すなわち1955年になってダマスカスはアレッポを抜いてシリア最大の都市になったこと、からもたらされた結果であるといえよう。このことは人口分布の変動に対応して商業構造がすぐに変わるというような事にはならないことを意味している。

シリアの商業構造は統計的に都市別は得られないので県別というオーダーで論ずることとなる。内藤は「小売業から都市システムを考える場合、都市間に機能の差から生ずる階層分化が現れにくいという特色がある。……シリアには、国営売店を除いて大規模小売店舗が少ない。また、支店、販売店網、をもつ民間の商店もほとんどないため、規模の面から階層分化がおこりにくいことが原因と考えられる。」と指摘した。

現在の社会主義体制が、この国の商業構造におおきな枠組みを与えて、発展を制約し、近年における変化を少なくしている。

### Ⅲ アレppoの都市構造

商業都市としてのアレppoについて論ずる前にこの都市の地域構造を簡単に見ておこう。ここは位置からすると年降水量373mm、降雨水日数54日（10月から4月）という乾燥した平坦な高原にある。現市域の中央を流れるクエイク川がこの都市の水源としての役割を果たしている。8月の平均気温が32度、1月の平均気温が5度である。

この都市のランドマークとなるのは城塞である。現在の都市では高層建築が増えているのでどこからでも見渡せるわけではないが、比高約50mの丘と現在空堀となっている濠をともなうて堅牢な城がそびえているのは景観的に第1の特色である。むろん、これが歴史的な都市核となっていることはいうまでもなく、その起源は新ヒッタイトの時代、およそ紀元前1000年にさかのぼる。現在の形態は13世紀のマムルーク朝以来のものである。

ついで城壁がある。かつての城壁はかなりの部分で取り壊されて、広い道路に変わっているが、残存部分からその輪郭の形態をよく復元する事は出来る。城門も減ってはいるが、5つは堅牢な姿を残している。その内側の旧市域はバーク・アル・ファラージュ地区のように一部は再開発事業が進められて変わったが、全体的にはかなりよく近代以前の都市形態を残している。アラブ的な袋小路をもつ幅の狭い複雑で不規則な道路パターンが卓越する平面形態である（図2参照）。新市街地が直交する幅の広い道路を基本としているのとは良い対照をなしている。

この旧市域には数多くのモスクが存在し、大モスクにはじまる大規模なものから、極めて小さなモスクに至るまで様々である。その分布パターンはランダムであって、分布密度は高い（図2）。1930年代の地図と現在とを比べてみてもその分布はほとんど変わっていない。これもま

た新市街地と大きな対照をなしている。大モスクはその高いミナレットとともに城塞に次ぐランドマークになるであろう。もちろん、多くの住民にとって重要な精神的より所となっている。常に多くの人々が出入りをしている。重要なお祈りの時には広い敷地が人で一杯になる。

ここは近代以降には政治都市ではなかったもので公共機関は少ない。中東の都市では官公庁の建物は概して目立たないし、また官公庁地区というように1カ所に集まらない傾向が見られると思われるが、ここでもそれはあてはまる。

かつての都市構造のなかで、重要な機能を果たしてきたのは商業施設としてのハーン（キャラバンサライ、隊商宿）であった。それは遠距離交易の中核的な施設として、商業都市の活動を支えていた。これはスークの中を含めて旧市街の至るところに存在していた。交通手段の変化に伴い、その機能は失われ、現在ではそのままの形態が残っている所は少ない。このハーンがどのように変化したかを知ることは、この都市の移り変わりを捉らえる良い手掛かりとなるであろう。

このような歴史的都市であるために、現代の都市構造と合わない部分が出ている。1960年代までは路面電車が走っていたが（30年代の地図には既に記載されている）、取り外されて、都市内の公共交通機関は専らバスに頼るほかない。またタクシーの占める地位も高い。要するに自動車の時代になっている。しかし、その普及に対応するだけの駐車場は旧市街にはなく、これが一つの大きな都市問題となっている。鉄道は早くから敷かれていたが、遠距離の他地方との間を結ぶものであって、都市交通にとってはほとんど意味をなさない。

新市街地には近代的な店舗が多い。中層住宅の場合一階に商店が入りサービス業が混在している。その上が事務所や住宅となっている。城壁の北西部に広がる地域がそれである。一部には歩行者専用道路が出来て近代的なショッピング・モールとなっている（1989年3月にはまだ工事中であった）。



図2 旧市内におけるモスクの分布（1930年代）

市域は50年代に入って急速に拡大するが、この間アレppoは経済的に発展をとげる。北部の農村地帯の近代化にともない小麦や綿花などの農業生産が上昇し、それらの取引の中心としてアレppoは再び活気を帯びる。60年代になると新しい体制の下で首都のダマスカスの方が人口増加率も高くなり、ダマスカスの人口規模がアレppoを凌駕して行くこととなる。

#### Ⅳ アレppoの商業形態

アレppoはその優れた位置、すなわち、地中海に近くシリア砂漠の西端にあること、に由来して、古来東西交易路の接点をなして繁栄してきた。とくに17～18世紀にかけてはオスマン帝国領内の東部の中心都市としてその名を高めていた。しかしながら19世紀後半以後ヨーロッパ



図 3 旧市内の商業街（1930年代）

の勢力が強まるにつれ、その地位は低下していった。

旧市街を中心にアレppoの商業活動を検討してみたい。旧城壁内の土地利用は圧倒的に商業施設が占めていると言っても過言ではない（図3）。それらは一般にスークと呼ばれているが、スークには次の4つの形態が存在する。

#### 1 大スーク

アレppoの大スークとして有名なもの（図3）で、この都市の構造としても機能的に見ても中心的な要素をなしていて、その占める地位は高い。これについては多くの研究があり、また短時間で調査出来るものではないので今回の主要なテーマからは外しておくことにする。13世紀以来の中世的な世界が現在にも保存され、その

機能を維持し続けている。建物全体は屋根に覆われており、明かりとりの天窗が空いている。大スークはモスク、ハーンと共存してアレppoの大商業複合体を形成している。食品、日用品雑貨から高級な絨毯、金細工にいたるあらゆる商品、すなわち身回品から、買回品、専門品まで、また中古品も含めてがここで取引されている。さらに小売とともに一部では卸売の機能も有している。しかし、卸売機能の一部（繊維、衣類など）は社会主義体制になって失われ、空白地帯が生じている。これに職人による手工業製品の製造小売が行われている。

形態的には大モスクを取り巻く形で、商店街が形成されている。中心となるのは東の城塞から西のアンタクヤ門を結ぶ東西に長く伸びる道路を主軸として、それに平行な何本かの細い道路とそれらに直交する道路であり、これらに沿って数多くの店舗と飲食店、および零細な工場とが並んでいる。その中央部に大モスクがあるのである。またそれ以外の大小のモスク、ハмам（公衆浴場）、ハーンの跡などがある。この地区のなかで業種による地域分化が進行していることは言うまでもない。

このスークは市民の生活に密着しており、この地を訪れる多くの観光客が買物をし、それを目当ての土産物に特化した商店もむろん存在するが、イスタンブールの大バザールのように観光化された店舗は少ない。アレppoの住民と周辺の住民とが主な顧客で、1日中賑わっている。

## 2 中央卸売市場としてのアル・スーク

卸売機能については今回の研究対象ではなかったが、概略を述べておく。この位置はアンタクヤ門のすぐ西側の新市街地にあり、クエイク川沿いの空地に新たに整備されたものである（年代は不明）。青果物は「青果物公園」が社会主義体制のなかで流通と販売をおさえている。農民からの生産物の買い上げ、価格の決定、市場への分配がこの組織を通じて行われる。しかし、すべてこのルートというわけでもなく、個人出荷の道が開かれている。このようにしてア

ル・スークに集められるので、ここでは青果物の卸売機能を果たしている。具体的な物流は大型トラックによって都市近郊および全国各地から野菜・果物が運ばれてくる。2棟の屋根つきの建物に140の卸売業者が立並び、さらにその周辺の屋外においても多くの業者により取引されている。青果物は1車両ごとに単品で搬入されることが多い。ここで市内の小売商人に分配される。小売業者へは、仲買人、輸送業者を通じてと中間業者をへる場合との2種があるようだ。小型トラック、オート三輪車、ろば、馬、荷車（手押し）などにより運搬される。

## 3 一般のスーク

これは常設店舗と屋台および屋台なしの移動商人から構成される青空市との複合体である。前者は農村へのサービスとしての日用雑貨店（農機具などをふくむ）、衣服類関係などで構成される。後者は主として青果物を扱う。毎日開催される。一部は金曜日に休む。その最大の規模のものがバーブルハディッドである。もともと各城門にはこのタイプのスークが、都市と農村、市内と市外を結ぶ接点として存在していた。旧市域内には幾つかの地点にこのスークが散在している。そのうち城門に現存するのは2カ所のみ（他に南のアル・マカム、ここはかなり規模は小さい）。広い後背地域との接点である。ここは市の東北部にあたる通路である。

このスークの空間構造を見ると常設店と屋台との分業、屋台においても専業とパートタイム（農民の副業）、施設（テント、屋台、はかり）の有無、複数か一人か、商品の種類の豊かさと単一品との対比が出来る。飲食を初めとするサービス業は少ない。総ての場合について調べたわけではないが、必ずしも空間構造的にみると地域分化ははっきりしていない。

## 4 定期市

週に1・2回開かれる。広場における屋台の形態をとる。アシュラフィーエに見られたように新興住宅地域といった周辺部に見られる。店

舗の規模はかなり小さい。このクラスのマーケットは調査していない。住宅地域の商業施設の貧困さを補う。より新しく開発された住宅地域では商業施設はきわめて少ない。

このほかに近代的な商店街が城壁の外側の旧市街を中心に形成されている。それらは50年代に市街化された地域に次第に拡大しているようである。しかし、より新しい市街地には商店街らしいものはほとんど見当らない。

## V バーブルハディッドの商業

われわれはこの地域において集中的に調査を行った。この地域の商業は以前から市の東部、ユーフラテス川にかけての広大な農村地域を後背地にしており、かつては穀物や羊の取引が行われていた。そのために多くのハーンが存在していた。それらは今では機能を失い倉庫や工場に転換されたり取り壊されてしまっている。しかしながら、現在でも都市と農村の接点としての機能をもっていて、アレppoの伝統的な形態をもつスークのひとつである。車で2・3時間の範囲から人々はやってくる。したがって、旧市内のマーケットとはかなり様子が異なる。金曜日も含めて毎日開かれている。ここにくる顧客および店を出している商人ともに農村的な色彩が漂っている。むろん、最も多い客はこの地域の住民であるが、バスや自家用車で時には軍隊まで買いにやって来る。

### 1 青空市

バーブルハディッド門を中心とした広場から東に伸びる大通りを挟んで店舗や屋台（テントないしは大きな日傘）が出店されている。市の概況を図4に示す。この通りは拡張されて北側の地区は建物が取り壊された跡がそのまま残っている。その工事が行われた年代ははっきりしないが1950年代後半といわれ、それ以後現在の形態の市が立つようになった。大通りは中央に分離帯をもっている。そして交通量が多く、信号が無いために車の流れは途切れることが少ない。このために通りの両側を行き来することは

それほど容易ではなく、通りの両側がまとまった形として一体性を作り出すことを困難にしている。この大通りの南側に大小36店、北側に26店の常設店舗が並んでいる。そしてその店の前に屋台や、テントを張って、また零細な商人は何等の設備なしで地面に直接野菜類を並べて売っている。その数はこれも大小併せて、南側に50、北側に46、合計96出ていた。しかし真夏では南側の方が樹木があったりして日陰が多く立地条件に恵まれ、規模の大きな店が多い。北側には零細な店が多いので、数のうえでは南側と北側とでは余り差が無いように見えるが、実際の景観上ではかなりの差がある。その長さは広場の中心からおよそ200メートルに及んでいる。ところで、冬場は商品の種類も少なく、商人の数も少ない。

以下の話は基本的に1987年7月21～29日の調査に基づく。

取り扱われていた青果物は次のとおりである。

1) 果物：スイカ、メロン、モモ、リンゴ、ブドウ、サクランボ、ペア（西洋なし）、いちじく、アンズ2種類。厳密に言えばスイカやメロンも幾つかの種類が見られる。

2) 野菜類：じゃがいも、たまねぎ、トマト、ナス、ピーマン、クーサ、キュウリ、カバク、いんげん、トウモロコシ、キャベツ、パセリ類、ミント、ハッダーディーン、おくら、にんにく、ニンジン、赤かぶ。ナスやいんげん等も複数の種類が見られる。じゃがいもからいんげんまでの品が基本的に多く、それに青葉類の野菜が見られ、この季節ではキャベツやニンジン等は余り多く見られない。これらの仕入れは農民の副業の場合を除くとアル・スークからである。しかし、その品質は中央卸売市場の水準からすると余り高級ではない。

青果物の種類は冬場には減るようである。1989年3月1～4日の春先にアレppoを訪れた際に見掛けたのは次の品々であった。

1) 果物：オレンジ、ミカン、レモン、グレープフルーツ、ザクロ、リンゴ、ペア、バナナ、やし。

2) 野菜類：トマト、キュウリ、ピーマン、赤だいこん、長ねぎ、小たまねぎ、ニンジン、じゃがいも、そら豆、とうがらし、チコリ、カリフラワー、キャベツ、ほうれんそう、レタス、パセリ類、にんにく。

果物をみると柑橘類が中心である。リンゴは夏の青い小さなものに比べて赤く大きなものである。夏にメロン、スイカが多く緑の割合が高かったのに対して、春先は黄色、オレンジ色の世界になっている。野菜は種類、量ともにかなり少なくなっている。とくに葉ものが減っているし、夏に豊富に見られたじゃがいもさえも相当に量が減っている。他方、夏にわずかな量しかなかったニンジンやキャベツが豊富だったりする。そして夏に見掛けなかったカリフラワーやほうれんそうなどの品々もあったことは確かである。

店の配列から言えば日用雑貨店を中心に構成され、その間に肉店、菓子店といった青果物を補完する食料品店とわずかながら飲食店が見られる。日用雑貨店はその商品構成からいってこの地域の住民を対象とするよりは、むしろ周辺部の農民を相手とした店のようである。

屋台を出している商人は、専業者とパートタイマー、すなわち農民の副業としてあるいは自家生産の農産物をもって来て並べているという、個人の零細な（多くの場合は1人で）の2種類ある。前者の場所は毎日固定して同じ場所に屋台ないしテントを構えている。そして2～5・6人が働いており、そこでは子供もいろいろな下働きとして使われている（野菜の鮮度を保つための水汲みやそうじなど）。後者はむろん毎日店を出しているとは限らないし、屋台をもたず、ときには量りすらもたないことがある。これら商人はどちらの場合もほとんどの場合男子である。

専業店は多種類の青果物（ただし、野菜か果物のどちらかに著しく偏っていて、基本的には分業されているとみて差し支えないであろう）を扱っているが、農民の店は単品ないしはごく少数の野菜を扱っている。そして、前者は広場

に近い人どおりの多い場所に、後者は東の縁辺部に多く店を出すという具合に分業体制がひかれている。

そのほかに少数ながら、羊肉を扱う店とにわとりを扱う店とがある。後者は卵も扱うが、その数は春先には増えていた。

開設時間は長く早朝から夕方暗くなるまで開かれている（政府の指導で朝8時から夕方8時までということである）。客のピークは朝の10時から11時頃にかけてであり、夕方もそれなりに混んでいる。商人はかなり遅くから店を出すものもあり、午後になってからの商品の搬入も見られた。むろん、午前中に全部売ってしまって早々と店仕舞いをするものもあり、午後になると歯が抜けたような並びになって、市としての空間的なまとまりを欠くことはなほだしい。

常設店舗を代表する日用雑貨店はこの地域の住民と周辺農民の双方を顧客とする形で、商品が構成されている。米、小麦、とうもろこし、雑穀類、空豆などの豆類、あんず、デーツなどの干物類、くるみ、ひまわりの種、各種香料、茶、ビスケット類、あめなどの菓子、にんにく、鶏卵、塩、食用油、ドブス（濃縮ぶどうジュース）などの食品。石鹸、クリーム、マッチ、やかん、ほうき、ポリバケツ、ボール、網、針類、ビニールの袋、アルミの食器、調理用具、パン焼器、灰皿などの台所用品。農薬、殺虫剤、杖、ロープ、各種の紐、むちなどの農業・家畜用の品々。こういった多種類の品が道路上にひろげられ、狭い店内に所せましと、かなり乱雑に天井まで積み上げられている。

この種の商店がこの地域の商業の一つの核となっていることは確かである。

## 2 屋根付きスーク

バーブルハディッドの大通りと鋭角に交わる、50メートルほどの長さにはわたる小道にトタン屋根でおおわれたスークがある。これはスーク・エル・ザフル（花の市）と呼ばれる。大通りに面した入り口に花屋があったことからこの名前がついたと言われるが、現在は花屋は無い。日



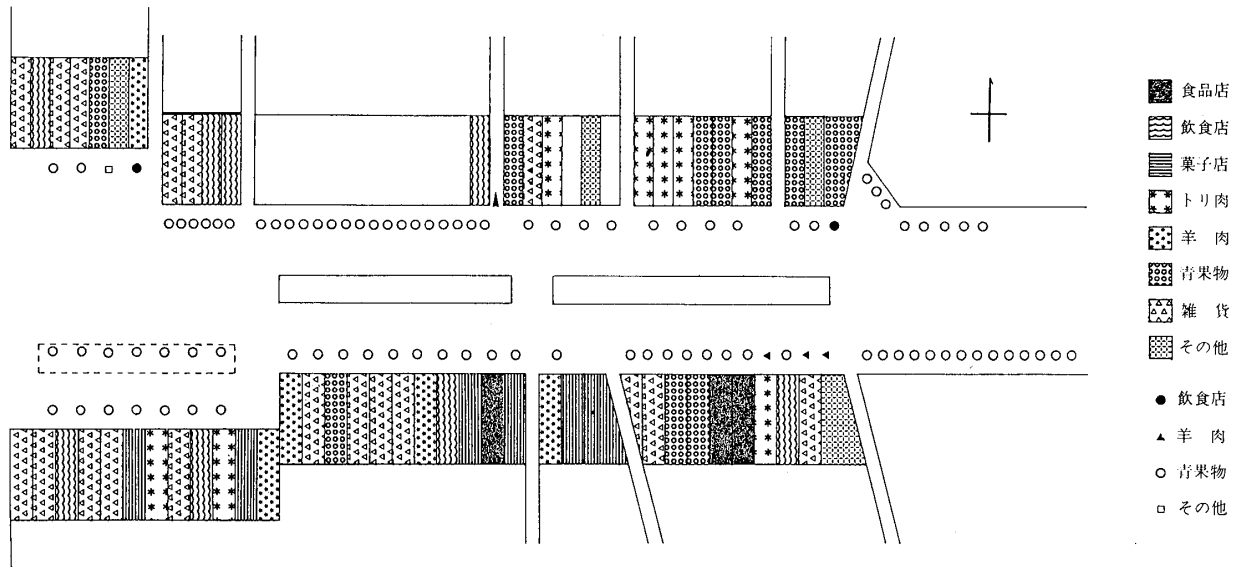


図 4 パープルヘッドの市の構造

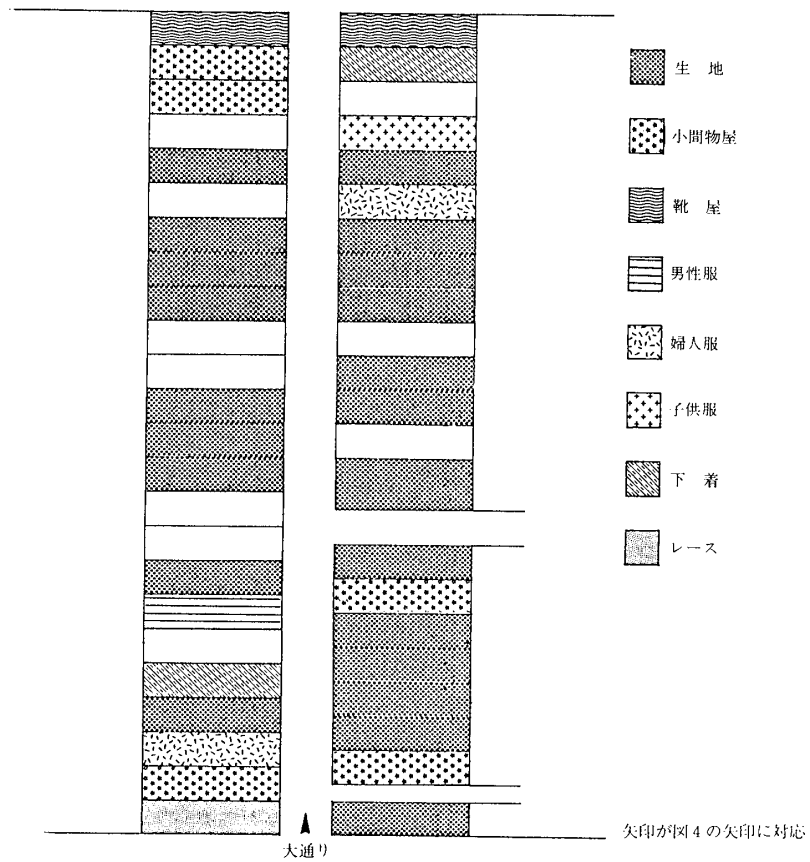


図 5 スーク・エル・ザフル

蔭となって涼しいかわりに、照明も少くて薄暗い感じがする。その奥には小さな広場があり、モスク、ハمام（公衆浴場）、水飲み場があり、この比較的狭い地域の中心部を構成していることになる。

ここは衣服・繊維製品に特化している。38店舗からなる（図5）。ところどころに閉鎖された店舗があり、あまり発展的なスークとはみえないが、女性客でかなり賑わう時間帯もある。これもその商品構成からして、主として農民層を相手とした店が多いと見受けられた。一店舗の間口はそれほど広くはない。しかし倉庫にはかなりの商品をもっているようである。商店主はこの地域に住んでいる。店舗構成上の特色は生地店が23と半数以上を占めることである。これは家庭の主婦が生地を買って家で自ら服を縫うという生活スタイルが主流を占めていることからくるものであろう。この形態はトルコでは定期市によく見られるものである。そして紳士服店が1、婦人服店が2、子供服店が1というように、既製服の店は少ない。このように買回り品的な商業地区となっている。

## Ⅵ お わ り に

調査が短期のため不十分な点が多かった。アレppo市のなかでのバールハディッドの位置をより明確にするためには、他の地区の調査を行って対比をする必要がある。この地域の社会制度が変わる中で商業の在り方も変化している。都市の発展過程を追及する中で、商業の側面からだけでも卸売と小売の関係を、都市の空間構造の中でより広く位置づけてみる必要があるであろう。とくに新興地域と旧市街との対比、ハーンの変質など興味のある、また取り組まねばならない課題は多い。ここではとりあえず一つの代表的な商業地区の現状を報告した。

## 謝 辞

この報告は1987年度文部省海外学術研究「オスマントルコ帝国末期以降の都市発展に関する地理学的研究」（代表者寺阪）によるものの一部にその後の補足調査を加えたものである。われわれの調査に全面的に協力して下さった当時アレppo民俗博物館館長のマフムッド・ハレーターニ氏に感謝する。また、ダマスカス大学に留学中であった東京大学大学院生の太田啓子さんに聞き取りなどでお世話になった。

## 文 献

- (1) Sauvaget, J. (1941) : *Alep : Essai sur le développement d'une grande ville syrienne, des origines au milieu du XIXe siècle*. Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris. 302 p.
- (2) David, J. Cl. (1986) : Alep-Damas : La fonction de capitale comme facteur de transformation de la ville. *Bull. Société Languedocienne de Géogr.* 109 année No. 2-3, pp. 369-393.
- (3) David, J-C. (1982) : Evolution des axes de circulation et d'activités à Alep de 1870 à nos jours : une continuité du développement urbain. *Présent et avenir des Médinas URBANA* Fascicule de Recherches No. 10-11, pp. 255-260.
- (4) Scharabi, M. (1985) : der Bazar.
- (5) 黒木英充 (1987) 「アレppo都市社会の構造—18世紀後半から19世紀初めを中心に—」『比較都市史研究』第6巻、第2号、pp. 13-28.
- (6) 内藤正典 (1985) 「シリアの都市システム」山口岳志編『世界の都市システム』古今書院 pp. 225-263.
- (7) 内藤正典 (1988) 「シリアにおける都市システム研究のパースペクティブ」川辺宏編『発展途上国の都市システム』アジア経済研究所、研究双書 No. 367, pp. 51-81.